

東日本大震災の発生時刻の午後2時46分。追悼のサイレンが響いた。あの日から6年。参列者が静かに手を合わせる。

その瞬間、寒風が校舎を吹き抜けた。雲間から漏れた陽光が慰霊碑を照らす。

児童74人と教職員10人が犠牲となった宮城県石巻市大川小校舎。11日に営まれた法要に石巻市の鈴木典行さん(52)もいた。大川小6年だった次女真衣さん=当時(12)=を亡くした。

妻京子さん(50)と長女星奈(せな)さん(20)、三女滯(れい)さん(12)らと共に黙とうをささげた。「真衣が生きていたら18歳だよ。会いたいね。会って抱き締めたい」。目が涙でにじんだ。

津波が学校を襲った2日後の2011年3月13日。鈴木さんは校舎西側の山沿いで、真衣さんを捜していた。軍手をして必死に土砂を掘る。小さな足が見えた。上靴のかかとの部分に名前が書いてあった。

「真衣だ! 真衣!」。呼び掛けても返事はない。眼鏡を掛け、通学用ヘルメットをかぶったまま。眠っているかのような表情で、下唇をかみしめていた。

身長約145センチ。その小さな体を鈴木さんは抱き上げた。自分の額を顔に当て大声で泣いた。山に登って助かっている。そんないちるの望みが、絶たれた。

鈴木さんは震災後、何度も被災校舎へ通った。各地から訪れる人々に大川小の出来事を語り伝えている。

教室のロッカー、廊下の上着掛け。そこに児童一人一人の名前を記したシールが残っている。真衣がいる。そっとなでながら、存在を確かめる。

「真衣を見つけた場所で話をするのはつらい。でも、後世に伝え続けなくてはいけない。あの子たちの尊い命を多くの人々の心や記憶に刻んでほしい」

震災から巡ってきた7度目の春。星奈さんは上京し、社会人として独り立ちする。滯さんは小学校を卒業、中学校に進む。身長は150センチ台。たまに真衣さんそっくりの表情、声になる。

形見に1通の手紙がある。題名は「20歳の真衣へ」。真衣さんが震災2日前の3月9日に記していた。

<大川小はどうなってますか? これからも体に気をつけて、早死(に)すんなよ。クラスの人の人生はどうなっているかねえ。これからも過去を大事にしてね。12歳の真衣より>

何かを悟っていたかのような内容に鈴木さんは思う。人生の終わりが決まっていたのなら、変えることはできなかったのか。あの日が最後だと分かっていたら、抱き締めて決して離さなかつたろう。

「星奈と滯には真衣の分まで幸せになってほしい。

真衣。ママと星奈、滯を守ってください」

早世した娘の七回忌に一人の父親として願う。



被災校舎周辺を歩く鈴木さん。真衣さんの亡きから見つけた現場付近に色鮮やかな花を手向けた
= 11日午前7時35分ごろ

